

ていよ／＼千鳥を憎みしかど大切なる母君櫻の禪尼のなさるゝことなればとがめもな
らず無念にはあれど月日をすゞされしに前にもふごとく千鳥は十九才の節に切髪と
なり今年やうやく二十一才にて其うるはしき姿は唐土の西施我朝の衣通姫を當世に粧
ひたるともいふべし殊に幼年節より御殿に勤めいまだ男子の肌知らず雪より白き顔ば
せに露もたるべき艶々しさに男は元來侍女婢女にいたるまでほれ／＼となる美人なれ
ば春心院を見て戀慕の心を惱さぬ者はなかりし中に御小姓忠之丞が御隠居附となりて
同じ御殿に在しゆゑいつしか人目をしのびてかたらふことゝなりければ忽ちにはあらは
れて平次殿の耳に入り以前の憎みもあるゆゑに春心院をば半の如き部屋に押しこめ忠之
丞をば上屋敷の家の中石部銀吉といふものにあづけられ重き役義の子息に似合す武家の
掟の專一たる不義を行ふ相手もあるに春心院と密通せしとはなはだもつて不届なりき
びしく申付べきなれども當家第一の舊臣番場忠太夫の家柄に免じ近日切腹いたさせ春
心院は重く長の押込といたすべしとはまだ平次殿の執心あるゆゑなるべししかるに石
部銀吉は預り忠之丞をいたはり何とぞ助命をさせんと思ふ所に母君櫻の尼より御内意
ありていかやうにも命をたすけ後日にいたし方もあるべし其方の落度とならば尼が威
光をもつて平次へは詫言なしてつかはす間よろしくはからひて他へ落してなりとも助

命よとの仰なりければ出入の町人御隠居の御ひゐきある梅里と内談にて忠之丞を夜中
に逃し梅里のはからひにて詮議厳しくたづねらるゝを退れんために若衆姿を幸ひと箕
掛かもじをもつて島田の娘に仕立伊勢本へあづけおき猶慈悲深き櫻の禪尼の御頼みに
て春心院の押籠をもたすけ出して何所へなりとも忍ばせつかはしくれよと御内意あり
そのとなどの用事と心配の重りければ戀しきお熊の許へも遠ざかりて居る所に今夜忠
之丞をたづね出さんとて横島悪八が踏込しゆゑ裏の方より連出してこのお熊の方へ逃
來りしなりさて梅里は此始末をくわしく語り忠之丞を當時あづかりくれよとありけれ
ば思ひがけなきとなれども梅里がたのみ今更に推量違ひの娘心を我ながら耻かしく恨
みし兪略をはじてかづ忠之丞をかくまひおき他に知らざじと請合ける

おくまやうやく心おちつ
きにつこりとわらひて

私やアマア何様に悔しかつたらう此様なことゝは知らなひで今夜

ア鳥居町へ欠出して往て此はなし合も仕様かと思つたのを理介やお花が無理に引止るから
往ずに居ましたけれども悔しくつて／＼チツトも寝ずに居た所を起されて腹の立中でお前
さんの聲を聞いて嬉しひ悔しひで何様せふかと思ひましたは 梅何の他人を此方はまた御屋
敷の御用で欠歩行て居る中にひよつとお前が氣でも變りはしまひかとお體苦勞をした事ぢ
やアねへくま 啞をお吐なねへ夜を案じておくれな位ならばちよつと此所へ寄ていそがしい

から四五日來られないが其氣で居るとか何とか言ておくれでも能ぢやアなひか 梅「ナニ左様言た所が疑がつて氣をもむから同じことだくま」ヲホ、、左様でもないハネそれだが此お子は實正に男のお子かへ何様見てもかはいらしい娘の様でお在だねへ 梅「それ見たがいゝまだ疑ぐつて居るぢやアなひかト笑ひながら忠さんどふぞお前を見せてやつておくんないましましアハ、、くま」ヲホ、、おかしいネエそして忠さんといふお名かへ 梅「ナニ忠の字をとり直してお中さんとでも言てもらふ様に仕やせう 忠」寔に大變な御厄介でお氣の毒なわけだ 梅「ナニ其様なお心づかひは入ませんマア」お休みなさいまし何れまた明日御相談申ませうトキニ何様仕ようノウくま」左様サねへお花を下へ呼て此お子を二階へ寢かしてあげる方がいゝぢやアありませんか 梅「夜具は調度いゝかくま」ナニサ明日は何様でもいたしますが今夜ア我慢をしてお寢なさいな丑刻半の鐵棒の音ヂャンくくくく

風月春告鳥卷之十二了

風月花情 春告鳥の序

それ狂訓亭の机の上は筆にて旅をするが如し何故となれば日毎に同じ所をしるさず昨日は貧家の愁歎場をたどり今日は廊中の全盛をうつし明日は何處の風情を綴らんと胸の日記の艸臥ては筆の建場の長あくびはてしもあらぬ戀の道を餘さずもらさず書留んと勸善懲惡の本意を出しより意見になるべき名處をさぐり細かに人情のおもむく道をたづぬれども更に不實の横道をしるさずさればとて正直は兎に角まはり遠く行路に埒があかぬに似たれど操の松の並木にはあしきやからのさまたげなく出世の都に着にけりはかならずつゝがなきものなりと悟らす爲の教えの近道人間一生道中をするに等しとおもふ所を序文に著はしました拾遺の種にもと口盡に江の島を出せしは浮世の旅のおもむきなりけり

江戸人情本一流の元祖

狂訓亭 爲 永春水 戲述

風月花情 春告鳥卷之十三

江戸 爲永春水著

第二十五章

それ戀の道たるや百八煩惱の隨一戀慕可愛の根元なる故に迷ふ時は一生をあやまるのみならず他生贖劫の紐ともなりて靈性をうしなふにいたるされども迷ふほどでなければ薄情の戀にして頼母しからず但し何事も縁ながらその原を慎みて始終全き契りこそ貴賤を不論男女の寔といふべきか此所に何屋か家名は知らねどいとしづかなる茶亭二階にしのび音を泣女の聲往來も途絶し子ノ刻時分同じ軒端の並びにてさへ渡りたる清元の淨瑠璃

「おもひ直してもたれより合おなご心はうたがひの深ひ中にもなほ深ひ二人が中に水さしてたとへのかしてあるとても言かはしたをほぐにしてそなたはそはね心かとむりに引よせうらとへば

ト語るを茶亭にて聞とる唄女口説の種の言がゝりも惚た因果か女氣の竟折やすき戀の癖

はな「それぢやア私きが悪かつたから堪忍して被下ましな 鳥ナニサ久しぶりて逢て其様にあやまらせる程の事もねへが餘りくだらねへ事斗りいふからそして薄雲の事はおめへも宿初ツから知つてゐるわけぢやアねへか殊に此間はじめて上方から歸つてちよつと出會た節にもいふ通りいまだに薄雲の方へは便りも仕なひわなはな「アレサそれだから私かわるかつたといふので有ますハネそしてお前さんも薄雲さんの事といふと憤然になつて腹をお立なさいますがネ 鳥何も此身が腹を立るといふわけぢやアねへゼはな「ア、サマア私のいふことをお聞なはいましヨよしや腹をお立なすつたと申ても唆程惚合てお在なさつたおゐらんの事だから少しも御無理とはぞんじませんけれども私がお目にかゝらふと約束をした日といふと待忙然にさせてお前様は仲の町の茶やに遊んでお在なすつた事を毎度後日で聞ましたから私がかがれてお待申た心を些も慈愛そふたとは思し召なひと申事サ

作者曰此節鳥雅の心中はいかにと看察し給ふぞ其以前此お花がお民といひし頃はまだ肩縫上せし乙女にて愛敬は深かりしかど只初心なるのみならず鳥雅を主人とおそれうやまひ遠慮と耻かしひので千話も口説もならばこそ何事も直にて自由になるばかり少し鳥雅には相手に足らぬ様なりしかど生得の艶しきをしたひ此度故郷へ歸り來りても風説を聞しとはいひながら先薄雲よりもお花の方を尋ね問ひしなり又此節さそはれて

兩三度廊へいたりしかど馳染の茶屋へは不行彼吉兵衛といふ者に出合もせねば薄雲が心ならず出勤せしとも知らず相かはらぬ全盛といふ噂を聞ておもしろからねば竟に一度も問音信ず薄雲も鳥雅の上方より歸し事は知らずお花は推量にて薄雲の事を嫉妬するも用心なるべし鳥雅はお花を元のお民と茶にして糶りし所名にしおふたるお熊が仕込磨き上たる唄女となり五分も透ざる前後の取まはし口舌の中にも先刻から上足をとられていひわけにまごつく程なれば相手になす力もありて面白く鳥雅の嬉しさいはん方なけれどもまづ少し腹を立たる風をして負る言葉も吹消したれどもまた今この如く薄雲とは深き中の事ゆゑと油ツ濃言まはされてじれツたく思へども過し日お花と出合べき約束なして其日に廊へ行し理解はこまやかにしたりける

鳥「どふだまだ疑ぐるのかへお前も此身が事はやかましくいふけれども此間約束した日にはお前の方で東連のお座敷だといつてはづしたぢやアねへかトまじめにいはれてさすが正直なる心ゆゑお花は氣の毒になりてはなアレサあの日にはネ私がお前様と約束したのを知らずに姉上さんがおくまの請合て急度上ますとお云だといふので詮方なしに出たんであります夫だけれども其事をお云だと私も面目がありませんからモウ薄雲さんのことを言はしませんヨ 鳥「サアコレ能から中直りに些呑なく猪口を笑ひながらさし出せばお花も莞爾

笑ひはな「ハイ有がたふト猪口を手に取る 鳥「ドレお酌を仕様はな「ヤヤ大そふに強ひお酌でありますねへト一口吞て下に置きはな「アノ若旦那さんエ 鳥「なんだはな「アノウ縁といふものは何様に結ばつて居るもので有ますだらふねへ 鳥「なにを云出すかと思つたら妙な事を聞たものだ籾から棒に何を思ひ出して其様な事を聞のだけはな「それでも考へて見ますと寔に不思議でござぬますものヲ私をはじめて迎島の御別荘へ参りました時分お前さんは薄雲さんの所へ一心になつてお出なさる節でありましたから夜なんぞは些も御宅にお眠といふ事はなし雨の降晩や何かはまどに怖くつていつそ欠出して何所ぞ賑やかな家へ参らふかと思つたことが有ましたが有ましたが其中不圖とした事でなんしからト莞爾笑ふ 鳥「ツイ／＼なんしてからと計り云ちやア分らなひからモウちつと委しく言て聞せなはな「アレくはしく言はなひでも宜ござぬますヨ 鳥「そんならば其なんしからの後は何様だせな「イ、エモウ止ませうお前はんがが笑ひ被成から 鳥「ナニ／＼決して笑やア仕なひから咄しな、なんした限で止られては氣にかゝる様だはな「そんなら云ますからお笑ひなさつちやア否でござぬますヨ 鳥「よし／＼此通り老實になつて居たらよからうト兩方の手を膝の上にしやんとかまへて四角に座るゆゑお花はわらひ出しはな「ヲホ、ア、アレナ其様になさらなひでも宜ござぬますハナ寔に意地がわるひねへ 鳥「ヤヤ／＼これでも惡ひのかイヤ咄を聞のは

餘程骨の折たものだと笑つて居るはな、それでもお前さんの様に老實になつてお在なさつては可笑くツて咄しも何も出来ませんものヲト笑ひながら衣類の前を合せて居り直しはな、サアはんとくに云ますからお聞なはいヨエ、引アノ夫からネお前さんも私も思ひがけなひ事で別れ／＼になつて仕まつてモウ兎ても再度お目にかゝる事は出来なひのかと思つて居りましたのに又斯してお咄してもする様になりましたのは寔に不思議では有ませんか 鳥ヲヤそれでモウお仕舞か大そふに前書が長ひから餘程むづかしい事かと思つたらば餘り短ひはなしで力が落たアハ、ハ、ハ、ハ、はな、アレサお前さん其様に茶にしてお在なさるけれども是でもモウ／＼お別れ申て居りました中何様に苦勞を仕ましたらう 鳥、左様いふとお前ばかり苦勞した様だが別れて居る中の苦勞の競べツこならお前よりか此身の方が勝くらぬだアア第一夢にまで見てそれから猶の事案じて急に上方から欠出して下つて來たといふ所なんぞは實が餘計にあるぢやアねへか お民のなんぎせし夢のはなしははじめて再會せしとき言聞せたる事とさつしたまへ はな、それは左様かも知れませんが其かはり私の様にお前さんは非道目にお合なすつた事はありますまい 鳥、ナニそれはお前が女の美麗爲で衆人が惚れて無理に口説のを言事を不聞からの事だしかし又嬉しがつてさひた事があるかも知れねへトいへばお花は顔色を變へて眉毛を八の字になしはな、なんでござぬますとエ 鳥、ナニサ田舎にも又相應に面白ひことが在たらうといふ事サ

トいはれてお花はくやしくなりいのちをすてよも身をけがさ はな、お前さんマア實正に其様な事でもあつたらうと思つてお在なさいますのかねへ實に左様思つて被下てはト なみだをほら／＼とおまこ とに私は無本意ヨお前さんにお別れ申て居る中の苦勞といふものはなか／＼今更お咄し申にも咄し盡されなひほどの事でござぬます其中にも寅吉といふ人は伯母さんの居る中から私をつかまへている／＼な無理な事を言ますのをぬけつく／＼して居る間に伯母さんは亡去ますし 鳥、ヨイ／＼お民最止にしな、女房に其様なことをいつて泣れると寔に氣が鬱情來てたまらぬへはナサア／＼其様な愚智や疑ぐりツこは止にして是から和合仕様ぢやアねへかトやさしくいはれて莞爾と泪の笑顔のうつくしさは燭臺のあかりに照らしてうるはしくお花は鳥雅に女房といはれしのみか幼名を呼べて嬉しさ飛立ばかり恍惚として膝をよせはな、ヲヤ堪忍して被下ましヨツイ過た事を思ひ出したら悲しくなりましたから 鳥、情人の事を思ひ出してか 鳥、エはな、アレ此身が事を思ひ出してかといふことヨモウ泣のは御免だサト笑ふお花も莞爾してはな、モウ泣は仕ませんヨ其代りに今の様に過た事でも疑ぐつてお在なさる様だと死て仕舞ますはそれでなければ幾時泣て居ますは 鳥、其様に泣のを恩にかけて呉ることもねへしかし其涙が一粒十兩づゝと看ても餘ほどの金高だから恩にかけるも無理ぢやアねへはな、宜ござぬますヨ何とても言て思入れおいじめなさいまし何様

も無理にお妾になれと言ひ付られたばかりで其殿さまがお死去遊ばしたといつて私に尼になつて仕まへといふのはかはひそふに無理ぢやアありませんかねへその上に今の殿さまの言事を聞なひからそれを遺恨に殺すのなんのとは餘りではござぬませんか 小「それは無理にちがひなひのでござぬますがネマア無理にも後家さまでお在のお前さんだから御小性情通をおしては表向わるくも聞えませうが私の身の斯して居ますのは寔に理にあたらなひ事たと悔しひ様に思ひますは 千「ヲヤ左様でござぬますか私しやアまだ其譯をばくはしくお聞申ませんが何様してか戀しひお方に詮方なしにわかれて此院へ来てお在だと言ひだつけねエ 小「アノウ私のはネ何様も他人にはなすと啞の様でござぬますヨ此間も些ばかりお前さんにお咄し申たつけが私が和哥町へ出たのはまだ十四才の節でありましたは其時分に私の母が人に欺かされて種々私の身の事を氣をもんてはやく自業に仕度の相應の旦那がなくつては借金はかり出来て今につまらなくなるの衣類がわるひと流行なひのと他人にも相談を仕てばかり居ましたつけがネその最中私を五六度お座敷へ呼だお客が何だかいやらしい事を言かけたり信切らしいことを言つたけれどもネ何をいふかと茶にして會釋て置たらば何時の間にか母人アの所へ尋ねて行て何様だまかしてか私を貰はふ遺ふと約束をして些ばかりしるしを取た事がありましたのサ 千「ヲヤお前によく得心もさせずにかへ 小「ア

、左様でござぬますがネ唄女の新子にでも出て居た當坐は何だか勝手が知なひからお客の言事をハイ／＼と請て居なければならなひ様に思つて居ますから實正の情心こそ放心とは仕ませんけれども女房になるの仕様のといふくらゐの事は口先でアイといつて置ますはネそれをその人か實事にして私の方よりは母人アの方を大事にして居る中其人の氣では最早極つて居るから大丈夫だと思つたのかお金がなひのか私の方へは減多に不來でからネ二年ほど過る中に私は鳥雅さんといふお方に深くおもはれて十六歳の暮に知哥町の年季を抜て貰つて其鳥雅さんに宅まで拵へてもらひましてネ私と母人アとは如以前別宅になつて居ましたのサ其時分には私をもらふといつた人は久しく田舎へ行て何の沙汰もなかつた所が田舎から歸つて來て私の身分の事を聞と大變にはらを立ましてネ母人にむづかしく言つた所がだんだん母人に理詰にされるし私はまた一度でも何した事はなし約束した證據のこともなひから奉公の身分で主人の勝手に付て鳥雅さんといふ人の方へ奉公する様にと言つけられて給金をもらつて居るのだから給金さへすましてお呉ならばまた何様でもなりませうが永ひ年の事だから實はお前を當にはしなひと返事を仕ましたらネ其金も出來ず自分も行届なひのを他人にいはれて悔しくなつたのか何様したのだか狂人になつたあけくにとふ／＼變な死様でも仕ましたそふでネそれから毎晩／＼母人の方へ夢現に其人の姿があらはれて

何でも私と母人を取り殺すといつて崇りをしたのサ 子「ヲヤ」怖ひねへそれでもよくお前さんの方へ化て出なかつたネエ 小「イ、エそれからネ最初の中は母人も私へ對して氣の毒だと思つて隠して居たんであります段々自分も怖くなつて私に其理をはなして聞せて私にあやまりましたのサ實は當座のしのぎに搦揆をしたがよもや永の年の中向ふてつきも仕まひし其中には何様かなるだらふと思つて居たところで此様なことになつたが何卒ありがたひ御加持か祈禱でも頼むか願がけてもして母人は詮方もなひが其方をば崇りのなひ様に仕度と種々に除をした上で何様も私までおそろしい夢を見たりうなされたり病氣になりそふな時になつてある人に教へられて何でも其人を一旦丈夫の様にして法事でも仕てから私が二年三年尼にでもなつたならば怨念が消るだらうからと勧められて實にもと親子が相談して鳥雅さんにもと崇と言様だといふのか悲しさに戀しひのを我慢してかならず今の男には明すなといはれたから思ひ切つてその通りにしたのであります當時考へて見まてと欺かされたのではなひかと思ひますが其分に夜ばかりか晝も薄ツくらゐ所には其否な人の倂が見られる様に思はれてモウ／＼前後の事も思はず此所へ願つて参りましたはト小濱の過しものあたりを千鳥は聞て溜息をつく／＼思へば世の中の儘にならぬが人の上身にもくらべて歎きけり

風月花情 春告鳥卷之十三了

江戸 爲永春・水著

第二十七章

爰に相坂町の熊の許へ遊びに至りてはじめは浮たるやうにいどみたる戀も縁にしの深かりしゆゑか竟に二人は水と魚はなれぬ中となりしかば兼て熊の生質と自ら云し嫉妬のまはり氣ならて梅里の浮薄たしかにそれと思ひ詰彼伊勢本へ踏込んとまで恨みし所へ其娘を連て夜中に梅里の頼みくはしき子細を物がたり他のためにも眞實を盡す男の生得とだんだん聞ば此程の無沙汰も無理とは恨まれず却てともく相談し力となるも重縁を結ぶの便りと才智の思案翌日いよ／＼お八重と名號し娘は忠之亟といひし梶原家の小性に相違なき事がわかりしかば安堵して其夜梅里と咄し合しごとくお八重の假名をまた假に改めてお中と呼びお熊の宅にかくまひ置けるゆへ忠之亟と知るものは絶てなくまた／＼世をしのばせけるが是よりますます／＼お熊と梅は同じ住居をせぬばかり夫婦のやうにむつましく朝夕往かひ

絶間のあらず今は浮名もたち過て他か噂を云止までにぞ契りしがそも／＼梅里の身のうへはいかなる人ぞとくわしくしるせばまづ相應に富家なりとはいはでも知れたるその行狀當時は隠居も同様に遊ぶが常の如くなるも家督の兄が世を去て家内に目上のものもなく其身が當主となるべきを諸事商人の世話をさらひて一人の娣に後／＼は聲をとりて家を繼せ自身は若隠居となるへき心にてありけるゆへ是まで女房をも持ず萬端家業のとりしまりは血縁の別家吉兵衛といふものに頼み通ひ勤め支配人とし任せ置只奥の離れ座敷を居間になし風流に洒落てくらしせしなり然るに此節はからずも時候の邪氣におかされて栗は疫癘のごとく煩らひて久しく重き病ひとなりて甚だ惱み苦しみけるが其熟病もいとひなくお熊は折／＼問ひなぐさめて看病する日もありけるがさすがに梅里に壯年だけいさ／＼か苦勞の和らぎしより日に隨ひて快よく今日は殊さら病ひをわすれ床の上に起直り病氣の見舞にもらひたる菓子折の蓋をひらきて獨言 熊なるほど鳥雅さんといふ人は信切な人だ此間中相坂町で出會て二三度呑合たばかりだのに病氣見舞までよこすとはどうも嬉しい心ざしの人だお熊も賞るしお花も恍惚て居るのも無理はねへトいふ折から枕もとの屏風をあけて小僧へい旦那さんお薬が出来ました 熊「はい／＼それは今朝のお薬か小僧「はい昨日のはお辰どんが流して仕舞ました 熊「ム、左様か今朝薬とりの節玄桂さまは何とおつしやつた小僧「え、引

昨日は御見舞被成ますと被仰ました 梅「ム、よし／＼其所へ薬はさまして置いてくれそして
 ナ吉兵衛さんが居るなら鳥渡呼て来い 小僧「へイアノウ番頭さんは先刻何所か往ました
 梅「ハア左様か夫ならば其方は鳥渡由町の萬久へ往て幕の内をあつらへて来て呉ねへか夫
 からその序に相坂町へ往てお熊さんに此間お咄し申た事は何様でございますか出来そうな
 らは早いのが宜でございますと左様云てくれろア、ア一筆書て遣るといゝが何様も手がふる
 へて書れねへよく間違はないやうに左様云のだヨ 小「へイ只お咄し申た方が宜でございます
 といへば宜しうございますか 梅「ム、左様いへば先方で承知して居るから／＼いふに
 は不及またつまらねへ事を間違へていふなヨ 小「へイ何ならお熊さんを呼んで来ませうか
 梅「左様サ逢て咄せば猶能けれども。ナニ／＼それにも及ぶめへから今の口上を忘れない
 やうに左様いふがい、小「へイ左様申ませうト立て行出合がしらに勝手口より中の間のか
 たへちよいと首をさげて誰にか會釋をしながら廊下傳ひに梅里の居間へ通る美麗の年増小
 僧にむかひて 女「ごうした小僧と旦那さんはお快よいやうかへ 小「ヲヤお熊さん私は今
 貴嬢へ参るところでございますくま「エ、旦那さんが何様か被成たのかへト びつくりせし風せい
 來りし女の心 小「ナアニ何様も被成たのじやアございませんといひながら奥へたち戻り梅里
 の床の枕元にて 小「旦那さんアノお熊さんかお出被成ました 梅「ヲヤ左様かそれは調度よ

かつたくま「今日は何様でございますへ誠にお案じ申して参りましたばトいひつゝしづかに
 火鉢のわきへ座るお熊の姿黒絨の紋付の花色裏御納戸の米澤博多の無地へ媚茶の糸にて織
 止を縫せ文晁先生の畫を寫眞にしたる蝶に葉の葉を色系にて縫ひ紫の蛇腹糸をもつて發句
 を縫せし帯を結び下着はせんさい茶の色にて梶の葉の二分ぐらゐの大きさの小もん縮緬惣
 地は白茶なり裾まはしは御納戸の海氣をつけ湯もじは淺黄ちりめんの切たての色に光澤を
 出したるをしめて襦袢の袖口は短かくして見へず紫の吾呂覆輪へ崩黄の糸にて篠すゝきを
 縫たる半衿をかけ髪は島田くづしの一が少し大き過たる結方は人によりて好嫌があるか知
 らねど上品よく目に立ぬ衣裳着こゝろをつけてよみ給はゞ梅里が迷ひしもつともなる女
 と察せるべしさてお熊はしなやかにすはりて梅里の顔をじつと視る男は心うれしく 梅「な
 ぜ其様に案じて來たのだくま「ナニネ今朝曉方にモウ／＼否な夢を見ましたから起ると直に
 欠出して参らうと思ふと長座お客が婦多川の歸りだと言て朝ツから三人連で来て今まで居
 ましたはネそれから歸るのを待兼て早／＼出て來ましたから今小僧さんが私の所へ往のだ
 と言ましたから胸がドッキリと仕ましたヨ 梅「なぜ其様にびつくりしたくま「アレサ貴君様
 が何様か被成たのかと思つてびつくり仕ましたアネ 梅「ナアニ二三日以來大きに快氣兼て
 の咄しもあるしました外に用もあり貌を見たくなつたしするからくま「ヲヤ啞ばツかりと莞爾

笑ひくま呼におよこしなさるとございませしたか 梅ナニサ呼付るも氣の毒だから小僧
 を使にやつたらば何かわからぬへと思つて出て来て呉るだらうと思つたのサトいふ中お熊
 は盆の上にあらし薬を看てくまヲヤお前さんお薬があるぢやアございませんか 梅ヲ、ほ
 んに左様だツげくまそれは餘まり冷たではありませんかマアお出し被成まし温て上ませう
 下藥茶碗を火鉢にかけてありし土瓶へのせて湯せんにして服用ながらくまそれをマア少
 しづゝでも餘程快氣おんなさいましたねへ此間中のやうだと私きやアモウ、心細いや
 うで何様いたさうかと存じましたは夫てもお花が親切に貴君様の身を案じて淨泉寺へお参
 り申たり下溝店のお祖師さまへお百度を上げに往たりして私に力を付て呉ましたは今日は
 また山谷の毘沙門さまへお前さんの病氣を其身の願がけをすると云て今朝早アく出て往ま
 したは勿論堀の若たけへ倚て延津賀さんに稽古して貰つて來る淨るりがあると云ましたが
 可愛さうに藝をば身に染て仕ますは 梅左様ヨ何事も實があるから頼母しいその代り頓て
 此身が全快して出かけるとお花の身のうへをば立派に世話をして遣ふと考がへて置たが忠
 さんは何様だおとなしく不自由な姿で居るかのくま左様サ全體が女のやうなやさしいお子
 だから其様に困りも補成ないやうでありますヨそれに此間も可笑とが有ましたアネアノウ
 お屋敷のお客が三四人でお花を連て船へ行と被仰てさそひに倚て被下た所がお花は其日に

董齋さんに連られて延津多さんと同伴に五山さんの會へ往ましたのサそれからお中さんが
 愚之返の名出てそのお客にお花は今日は書齋會のお座敷へ出ましたと言とネそのお侍がお中さ
 んの貌を見て笑ひながら何を戲言をいふのだ其方がお花で居ながら其身が留守をつかふも
 のがあるものかといふとネ連のお侍がイヤ、お花に似て居るが何時呼だお花ではないや
 うだといつて歸りましたは私は中の間に髪を結て貰つて居て何様におかしうございませ
 らうお中さんが挨拶にこまつてお在の申が餘程宜ございませしたヨヲホ、、、 梅なるほど
 左様いつて見ると思さんの貌はお花女に似て居る所が餘程あるヨト少し考がへて 梅よし
 〱猶の事能はへくまヲヤ何の事でございますへ 梅エ鳥雅さんの事に付て工夫した事が
 あるからサくまホンニ鳥雅さんもまだ實正に勘當が免ない中だに餘まり遊びが過るといふ
 とでまた御家でやかましいさうで御座ます 梅ナニ、そりやア何と言たからとつても本
 店の御祖母さんが鳥雅さんの肩を持って居るし家を再興した大事の御祖母さんのいふとは盛
 ても否といふ事はならぬへくま左様でございますかそれぢやアお花も苦勞する甲斐があり
 ますネ 梅左様サそれはさうと何は何様して居るのお王は作者いはくこれはこゝにはじめ定めし
 我儘ばかり言て居るだらうネくまイ、エ何様して誠におとなしくしてお在てございませヨ
 それにお花がやさしくしてお相手になるもんだからお座敷へ出ない節はお玉さんと和合終

日合せものをしてたり浚つたりして居ますから賑て宜ございますは 梅「左様かノ實はあの嬢は私とは腹達の兄姉だけれども少しも隔心様な事もせず誠に私へ遠慮なく我儘をいふから可愛がつておけば種々と兄をこまらせてならねへそれだからさぞお前が世話だらうと思ふけれどもモウ少しお前の宅へ置いて呉なせへ何様も傳染易い病ひだから此全快際にわるくすると血脈へは染りたがるものだといふから床でもあげるまで側へ置たく無い面倒だらうが最些だくま」ナアニ面倒などがありますものか私もマア必竟はお前さんが如彼に可愛がつてお在なざるから何卒傳染病なんぞは煩らせ申たくないと思ひましたればこそお前さんの御病氣を見かけて私どもへお連申たくらゐだから成たけ氣をつけて居りますヨそれだから此上とも安堵してお在被成ヨ 梅「ナニお前の世話だから如在ないと思つて居るがそれだけ氣の毒は何卒はやくあの嬢に聲をとつて樂な身の上に成度もんだくま」ヲヤノノ今までは樂でなかつたのでございますかへ餘り虫がいゝねへ此上に樂の被成やうはないではありませんかホ、ハ、梅「ナニサこれまでも苦勞もないが何様も世間があるから思ひ切た事が出来な

いはなくま」ヲヤ世間をはゞからなければ何を被成氣か存じませんが何も思ひ切たとなさらずとももの事ぢやアありませんか私さやア思ひ切といふ事は戯言にも否でございますヨトといふ折から奥番の小僧が勝手働きの女にこしらへて貰ひし養花の茶を小土瓶の儘茶わんをそえてもちきたり續てお熊が土産の練ようかんを南京の菓子鉢へ入れて持出 小「へいお茶をトイひつゝまた梅里に向ひ 小「へいこのお菓子はお熊さんがお持なさいました 梅「ヲヤ左様か土瓶は其處へ置いて行そしてな今に伊之吉が由町から歸つたら幾女に膳をこしらへて持て来いと言 小「ハイト小がうは 勝手へ行 梅「今日は格別に美麗なつて来たノウそれぢやアお前の方よりか此身でもひきる事は夢にも出来ねへくま」アアレサお前様マア今が大事の所じやアありませんかまたぶりかへすといけませんからモウ些辛防して薄着にお成なさいますな

第二十八章

再説お中は實は男子 忠之坂也相坂町に身を忍び居る中に屋しきの方も大略は事濟てかの横島等は却て咎めをかふむり國元へ押込となり春心院をば御母君のはからひにて何所へか被遣し由の聞えければまづ安堵といふにはあらねども少し心やすく其日を送りしが猶なまめきし娘姿にて今日も二階につれゝなれば物の本をよみて居たりし後から梅里の姉かのお玉元來お中を男どと知つたる故に笑ながら本を讀て居たる脊後から出し抜に 玉「お忠さんじやアないお中さん何の本を一心に成て見て被成ますへ 忠「ヲヤお玉さん何時の間に其處へ來

てお出だ 玉ナニモウ少し先刻來ましたけれども餘まり一心になつてお在なざるから夫で無言で居ましたのサ 忠アレマアお前も實がないねへ私は淋しくツてならなひから中本でも見て氣をなくさまふかと思つて居たのにお前は側へ來て居ながら口も利ずにお在のは恨みだネ 玉ナアニ左様じやアありませんはねへ私もお咄しでも仕様と思つて參つたけれども折角本を見てお在なざるのに口をさゝましたらお邪魔だらうと夫故我慢して居ましたのだからかならず悪くお思ひてなひヨ 忠ハア〜御もつともてございませ御免なさいまし氣がさかないから一言いふと直にこめられますネモウモウめつたに口をさゝますまいヨト苦〜しくいはれてお玉は氣の毒そうに貌亦らめて涙ぐみ 玉お前さん何ぞ腹をお立被成ましたか何卒堪忍して下さいましな。エ私は何もお前さんを馬鹿にするの言込るのと其様な氣じやアございせんがツイ氣がつかないで悪いとを言ました何卒御免被成ましヨト泪ぐみたるかわひらしさ忠之亟は莞爾と笑ひ 忠ヲヤよしか啞だヨおまへが實情にうけては私は氣の毒だヨ斯して他の世話になつて居る身分でたとへ何様な事が有たにしる腹を立なんぞといふ様な我儘が出来るものかネたかゞ食客の身のうへだものヲ 玉イ、エお前さんはお屋しきの若旦那さまでなか〜私なんぞとお友だちになつてお遊び被成のではないのだけれども餘りお前さんが女中衆と種々などを被成たからそれだ當分據なく此處のお熊さ

ん所にお出被成のだと兄上さんが 梅里の事をさしていふことばなり はなしましたものヲ 忠ナニ能推量なことをおいひナ私が女中衆と何かしたのなんのと何人が其様な事を言たのだへ梅里さんだと言て其様な事をいひなさる筈もなし元來ないことだから 玉イ、エお隠し被成ても私はよウく知つて居ますはしかもその女中は先の殿さまのお妾でモウ〜誠にくつくしいとも何ともたとへやうのない御機色で歳もまだ十八九でお在被成と聞きましたものヲ 忠ナンノつまらない啞ばつかり何様して其様な事が有ますものかたとへまた一人や半分情合のあつたものがあるにもした所が過た昔のとだものヲ今では忘れて仕まつたのサ 玉ウそ〜其様な言紛らかしは聞かせんその證古にはお前さんも何だか折〜おもひ出して御鬱氣なさることがございますから則その女中の事がお心にかゝつてお案じ被成のでございませう、たしかに左様でございませうヨト

あじな所から仕かける戀路互の心も相坂町に同じ住居の好た同士または餘義なき赤繩とおもはる

風月花情 春告鳥卷之十四了

風月花情 春告鳥卷之十五

江戸 爲永春水著

第二十九章

再説お玉は何時よりか戀の染衣着て見度春の心の催ふしてかち中へ對し戯言に言かけたりし言の葉をきけば男も歳ゆかぬ身には前後の思案もなく竟ざれ言の念入て互にこゝろ亂るゝはまた是前世の因縁か自然ともつれよる糸の結れかゝる其風情 忠なるほどお前は他人のことをせぐり出してこまらせるのがお上手だねへ 玉アレサ左様じゃアございませぬがネ 忠ございませぬが何様したと言ふのだへ 玉ナニ何様も致ませぬが其お方は嘸お前さんを戀しくつてなりませぬと存じましてサ 忠それは御信切な思召でございませぬ 玉アレサ戯言ではございませぬヨ大かた今時分はお前さんの事を思ひ出して泣てお在被成だらうと存じますと誠にモウ／＼おかはひさうでございませぬ 忠ナアニ其様なをいひかけて私を間落す氣でお在だらうがなかなかお前のいふやうに悲しがつて居るだらうの何のと

いふ深い事はないのサ梅里さんは何と云てお前にお咄しだかしらないが實はマア私が氣がきかないからはやくいへば他人に勝手に爲れた譯で誠に此方ばかりつまらない目に逢たのサ夫だから今更執念を残すの何のといふほどに面白かつた中では決してないヨ 玉ヲヤヲヤ啞ばツかり其様にお隠し被成ますけれど私は姉上さんに これはこの家のおくまの事をさしていふとばなり 委しく聞ましたは誠にお前さんも實がないねへ早く誰ぞに頼んで其お方の所へお文でもお上被成ましな何様に案じてお在だか知れやアしませぬヨ 忠ナンノ何様に恩つて居るか先の了簡がしれるものかネ 玉ヲヤ／＼うそ／＼口外では其様なことを被仰けれど則ち前さんも心の中では逢たくおもつてお在なさるのサそれに違ごさいませぬ 忠ナンノお前が占者ではあるまいし何様して私の心のうちが知れるものかネ 玉イ、エ占者でなくつても私にはしれますは 忠イヤこれはおもしろい夫ならネ私が惚て居る娘が在がそれが知れるならば當て御覽 玉ア、知れませぬとも則ち屋敷の千鳥さんの事でございませぬ 忠ソレ左様いふ占者だからいけやアしないそれでは少しも當りは不爲ヨそして私が極惚て居る娘と言は誠に美麗容貌だアネ 玉ヲヤ千鳥さんもモウ／＼美麗とも何ともたとへ様のない御艶色じやア在ませぬか其外にまたお前さんが其様なに惚てお在のうつくしいお方があらうとは何様も忠知れないといふのかへ其様な易者があるものか 玉イ、エ知れませぬはマアネ 忠知れ

るなら早くお言な 玉「ヲホ、、せわしないねへマア能考がへて看なくツてはトいいひつゝ莞爾忠之亟の顔を詠める其愛敬のうるはしさ花の口もと月の眉雪より白き衿元にはつれかゝりし黒髪もおもむきありてあざやかに露の海棠柳の雨も不及艶の島田鬚見とれるばかり暫時は男も言葉なかりしが 忠「サア何様だネ大そうにむづかしい考へ様だネトいへばお玉は笑ひながら 玉「それではネアノウお花さんで被御座ますかへ 忠「ナアニ大違ひくお花さんは美麗けれども娘ではないはナとして鳥雅さんとか誠惚て居そうだのに彼嬢も鳥雅さんには命も捨る氣てといふからなく他人が何と言てもはじまらないはネ私の惚て居る娘はお花さんよりも惚た欲目か猶うつくしい様だから氣をもんでも不及とかも知れないヨ 玉「それでは何様も私には知れませんヨ何様言てお聞せ被成ましナ 忠「イ、エウア止ませう兎ても出来ない相談だから 玉「ヲヤなぜでございますニ 忠「なぜといつて咄した所が其娘が所詮不承知だから 玉「何所のお娘成かぞんじませんがお前さんに惚られて否といふ者はありそふもない事でございますネ何でもモウお前さんと千鳥さんとかの様だと宜ございますねへ相惚てお在被成から 忠「左様サお前と此間此宅へ鳥渡來被成た好さんとやらの様だと夫こそ誠に相惚だから譯はないのサト所爲とぢらしていへば娘は少し氣色を變て玉「ヲヤ、何時私が好さんを宜といひましたへサア何時左様申ましたト膝をんゝめて

問よるもあどけなくかはゆらしけれ 忠「いつでもサ私は聞きました事がありますヨ 玉「其様な啜ばツかりナニ私が如彼お人をマア 忠「情人にお持ならばかはひからうネ 玉「宜ございませ何とても被仰ましエ、モウ悔しいト襦袢の袖を前齒でくはへて引ばる姿よろしく推察あるべし 忠「ヲヤ、また悔しいのがはじまつた悪い節おこる蟲だねへ些大きな灸でもすゑて上様 玉「サアすゑて被下ましサア、ト身を摺つけて相蝶風情いづれを娘と他見には看わけもならぬ島田鬚名さへお中と呼るゝ男元來艶弱なる忠之亟お玉は玉をも欺むく美麗梅と櫻の一枝に咲たるやうに其姿拙なき筆に書わけ難し

x
x
x
x
x
x

忠「サア灸點をおろして上やう 玉「アアレサお止なねへヲホ、、 忠「そんなに否がるくらゐなら下家で一人でお遊びなら能のに 玉「ナニ否かりは仕ませんけれども姉上さんが歸つた様だからサ 忠「ナニお熊さんが歸つたからといつて處女同志で遊んで居るのに誰が何といふものかネ 玉「ヲホ、、能處女でお在なさるねへ他見は誠にかはいらしい風ぞそ

して 忠根生がおそろしいと言のかへ 玉「イ、エ根生はかはいらしくツてもネ薄情でお在だから油断はなりませんと申す事サ 忠どうして〜實が有すぎる程あるから却て他人に馬鹿にされるのだけはネ 玉「ナニ誰がお前さんを馬鹿に仕ますものか 忠それでもお前なんども私を馬鹿にするのではないかへ 玉「アレマア咬程咬ばツかり 忠「ナニうそなものか只今灸をすへて呉ると言て置いて灸點をおろしてあげやうといふと脇へ逃るではないかへ他に物を頼んで置いてサアといふと否だといふのは則私を馬鹿にするのだけはネ 玉「ホ、ハ、ハ、それだつてもアレ 忠「身ぶるひをする程私をお嫌ひのかへ 玉「イ、エふるへるほど嬉しうございませは 忠「急度左様かへ 玉「アレサマアお待被成ヨ實にお前さんの心はかはりませんネ 忠「しれた事サ

此節しも軒端に釣りし風鈴の付たる短冊の糸解て忠之亟とお玉の膝元へ落とす

吹ぬまはなびかぬにこ花すゝき

風にしたがふ心とはしれ

玉「ヲヤ何といふ歌の心でございませへ 忠「エこれかへたしか二條の院の讃岐の歌だがネ深しこゝろは兎も角も風次第とは否な辻占だ 玉「アレキそれでは判断の被成やうが悪いではございませんか花薄もお前さんの様な粹な風をば招くといふ心でございませう 忠「なるほ

どさすがに梅里さんのお娯御だけ何事も如在ないねへ 玉「ヲヤ〜私はいけない事を仕ましたヨ。コラ簪を此様に折て仕まいました 忠「はヲヤほんに大變だネしかし鼈甲だから丁度其玉の所から繼ばしれは仕ないヨ 玉「ナニ折ても惜くはございませんがモシ姉上さんに聞れると困りますものをト少し困る風情はさすがに深窓にやしなはるゝといふ程にはあらねど正直なる處女ならんか 忠「モシお熊さんがお聞ならばお中さんが灸をすへて呉るといつてツイ折ましたといふのサ 玉「何様して其様などを言て御覺被成ナネエ何様に叱られるか知れやア仕ませんは 忠「なぜへ 玉「なぜとて斯してお熊さん所にお在被成中もはやくお屋しきの方のお詫を済せてお前さんも御本家へお歸り被成様に爲ないければならないと私の兄上さんが申て居ますものを私と何した事でも知れて御覺なさいな夫こそ大變でございませ 忠「何様して〜兎ても本宅へ歸られる身分でもなしたとへ歸られる様な事が萬一あつてもお前の事は 玉「イ、エ何様思つても私の様なものが始終お側に居るやうにはならないとはじめから知つて居ても今さらそれが悲しうございませはトいひつゝ涙をばら〜情と溜息つく折しもあれ階子の際にてお熊の聲 くま「お玉さん今歸りましたヨ

第三十章

再説梅里は日數立て病氣全快なしけるがお玉は相坂町の家に馴染て兎角お熊の側に居度よしをいへば元來兩親もなく我儘育のことなればまづ其儘捨置しが此程烏雅の不首尾より思ひ付たる手段ありてお熊の許へ來り衆人うちより酒盛をしながら梅「トキニお中さん明日はお前を連れて見合に行のだから其氣で居てお吳ト出し扱に言はれて座中は不審の顔色中にもお玉は驚天し玉「エお中さんが聲にお出なさるのかへト少し泣もするかと思はれる風情忠之亟もいまだ其意を不得といへどもお玉の顔色を他に推察もするかと心配して言葉もいださずお熊は是れを聞てくま「ヲヤ／＼それではお屋敷の方の事にかまはずかへ何様もまだ今急に聲なんぞにお出なさつては濟そふもないものでござぬますねへトいふをお玉は心の中に頼母しく思つて居る梅「アハ、ハ、ハ、ナニ聲に往れるものか娘姿だから嫁に往のサしかも息子は寔に好男だが其代に情奴が數人あつて困るけれども媒人が是非と頼むからマア明日兩見をさせるつもりだから髪を結たり化粧をしたりして支度をはやくして待て居てお吳なせへ着物はお玉のを晩にでも持して越すからお熊さんいゝ塩梅に着せて上で吳なヨくま「ヲヤ／＼お前さんマア何をお言ひのか少しも分解せぬへ男のお子を嫁ヨ遣るとは

何の事でごぞぬますねへ聲にお出なさるにはお玉さんの着物を着て互視に行とお言ひではおかしひ形容の出立なりそして先方が息子なら此方が處女でなければならぬのに忠さんが假の名は男だから行まひぢやアありませんか梅「アハ、ハ、ハ、實身は男でも此姿はかはひらしい娘だから私しの姉だといつて互視に連れて往ても能ぢやアくま「なひかそれはマア明日たゞ見せるぜかりなら女の子と見へるから能ござぬますがいよ／＼夫が極つて嫁に貰はふといはれたら何様なさいますへ梅「ナニサ其時は實正の女を遣るから能はナトいはれてお玉は其かすいりやうしてむれにぎつくりこ玉「ヲヤ兄上さん私は嫁に行のは否でござぬますヨト身をやるといふのたへしかばこらへかねてわがまゝに梅「何様してまた家の跡取を他へ遣られるものか此方で遣らふと言つても評判の我儘娘だから向方で御免なさいましたと斷はるはなくま「そしてマア忠さんを視せて置いて其後誰人を嫁にお遣んなさるのでござぬますかむづかしそふな事でごぞぬますトお熊をはじめ座中の人々合點のゆかぬ其風情梅里は一人微笑して居るゆゑ忠之亟は膝をすゝめ忠「梅里さんその事は實正でござぬますか何様も私には解せませんが何所へまゐるのでござぬますねへ梅「エ嫁に行先かネ忠「イ、マア其互視に參ると被仰のは茶番の狂言でもござぬますのかへ梅「アハ、ハ、成程茶番の趣向とは尤な考だが大違ひサくま「それでもお前さん一人で承知して笑つてばかりお出なさるからさつぱり分解せぬはネットいふ所へ座敷から歸り來りし

彼お花此程鳥雅の押籠られしと噂を聞しのみならず絶へて便りもなきゆゑに心を苦しめ居ながらも姉のお熊へ遠慮して少しも苦勞を顔に出さず元氣に座敷を勤めしが梅里にむかひはな「ヲヤ今日は能被爲入ました今朝もお座敷へ出掛に姉上さんとお前さんのお噂をいたしましたは梅、今日ら來なひければい」と言つてかへはな「ヲホ、何様して其様なことをいはれますものか」アレサお花梅里さんのいふ事をはじめに言譯せずともよひヨ先刻からわからなひ事計言てお在だアネそれよりかうア早く着類でも着かへて休息なヨはな「アイナニ今日はお店の若イ衆ばツかり揃つたお客だから些も骨は折ませんヨトひながら衣類を着かへに次へ行お熊はまた梅里にむかひくま「サア嫁を遣る先方は何所だか早く言てお聞せなさむましヨ」梅、嫁に遣る先は鳥雅さん所だが嫁を見に茶屋へ來る人は鳥雅さんの本店の祖母さんと鳥雅さんの母人さん計サくま「エ鳥雅さんの嫁にかへトお熊をはじめお玉もお中も顔見合て呆れてしばらく言葉もなしお花は一間隔てし所にて鳥雅へ嫁が行と聞胸にギツキリ思はずも着ものを脱替ながらイ聞するくま「ヲヤ夫でも鳥雅さんはまた首尾がわるくツて親類の一番むづかしい家へ預けられて押籠になつてお在ぢやヤありませんか夫に嫁を貰はふとは啞らしうござぬますネエ彌それが眞正ならばお花のことも是限にされちやア何様もかはひそうでなりませんまた私が付て居て其様な事になつて仕まつては第一私

が悔しくもあり外聞もわるひから何所までもお花の肩をもつて道理を付なひければなりませんヨトいふを聞取お花は悲しき中にも有難くお熊を蔭ておがみ居る梅、ナニ何様して其様なつたからといつて鳥雅さんの方へ何の角のといつて懸つちやア此方がおとなしくなひはナ元を正して視るとお花嬢は前に名をお民といつて鳥雅さんの家の目下の娘だといふからなか／＼表向になつては口はさけなひはナくま「イ、エそれだツてもマア是までお花の苦勞をしたのは何様だか知れやア仕ませんはネたとへ元は目下でも奉公人でもかまやアしなひわけなつて居まさアネ全體花女が娘で居たときに鳥雅さんの方から手を出してそれから後に誰もお花の腰の押人がなひからそれなりに田舎へ追ひ遣られたといふ事てござぬます其後もお花は貞女を立て命がけて私の方へ來て終始鳥雅さんの事ばかり苦勞にして居まして漸々久しぶりで巡り逢て花女の實情も届き鳥雅さんも上方から歸つてお在の甲斐もあつたといふ様な所で是限にしもなさるまひけれどもまだお花に嬉しがらせる程の息繼もさせずに置て今直に女房をお持では餘りてござぬますはお花は咬裡温厚氣の子だから堪へて居るかも知れませんが私は鳥雅さんを相手理屈を言ますヨそれでなければ花女を婚禮の席へ指込せて遣りますト手強くいふはお貴の爲を思ふばかりか其身の垣根萬一梅里も他心が出たる節の用心に如斯言出せしなるべし梅、イヤ大變にむづかしく言ノウ何もこれが鳥雅さ

んの心から女房を急に貰つてお花嬢の方を止に仕様といふ譯ぢやアねへはナ鳥雅さんが自分の勝手我儘でまだ此地の首尾も直らなひ中に歸つて来るさへわるひのに預けられて居る家に腰も落付ず遊び歩行たりお花嬢にばかり恍惚なつて騒ぐのが親類中へ知れて嚴敷押込られたのだアナクま、イ、エそれだつても、梅、コレサマア此方が言ことを終まで聞なヨ此度の事はまだ鳥雅さんは知ずに居のサ其所で鳥雅さんを秘藏にする祖母さんがまた最負の了簡を言出して全躰鳥雅に相應な婦人でも持して置ば自然と放蕩も不爲のに壯年を獨身で置いて少しぐらゐ女郎唄女に金を遣つたとて上方まで追登せたり押込たりする程の事もある者か是から祖母が鳥雅の身分を引請て別家する。何様で本店の出店の方で金を出して鳥雅は別に店を出させるはづの事だから其様にして遣てくれる其代りに以來祖母が隠居料を鳥雅の方へ同居に入て萬事の世話もするまた直に相應な娘を嫁に貰つて鳥雅をおとなしくして視せるからと言出し被成て道に大切な祖母さんの事だから鳥雅さんの家はいふに不及出店親類でも否といふ事が出来ずサまづ其積に極つた所で祖母さんがいふには兎てもの事に嫁もおれが鑑定で貰つて鳥雅に否應は云はせなひせめて夫を衆人への詫言心鳥雅に我儘をいはせなひといふ證據に鳥雅には見せずに祖母が視て嫁を貰つて仕まふといふ事に極つて其嫁を尋ねる段になつて居るといふから梅里が心當りの娘を遣らふと思ひ付たが其娘を見

せると互視の節に萬一故障が出来ては行なひから夫故お中さんを互見に頼んで視せて嫁入の節には心當の娘を取替て遣る手段がありやす尤後で化は顯れも仕様が鳥雅さんの氣に入娘てさへあれば娘の里といふものが梅里で此身の姉と云からは親類や出店の奴等が何の角のと吐しても齒は立せねへ覺悟でさせる嫁入だかもつとも其場へ差掛つたらばお花の心持が不安心だから此身が方へ連て行て得心する様に異見も仕様と思つて居やすお前も其氣でお花女をしやくらずに隠びんにさせてお男なせへトいへばさすがに才智のお熊忽ち梅里の心を悟り莞爾と笑ひくま、なるほど左様お云で察と事が分解ましたは夫ぢやア鳥雅さんの薄情でもなしお前さんの世話の被成様も無理もなし兎も角も鳥雅さんが一ト株の主人に成て納りさへすれば其時お花の身分も安堵されますネト目交をすれば梅里もお熊が承知せし風情に笑ひをふくみ、梅、ネ能向だらふト自慢をする程でもないかへトいへばお熊は機嫌よく笑顔にてくま、ハイ、それではモウ申分はござるません此上お花がこゝろを違ひをいへば私が合點仕ませんヨトいふを聞とるお花の胸はまだ落着ぬはなしの前後何様なる事とかあんじてもお熊へ遠慮し其席へ出て白地に聞れもせず涙ぐみてひかゆればお玉は其身の戀心にお花のこゝろを引競べて膝をすゝめ、玉、アノウお見上さん其嫁に行娘は何所の子でござるますへ、玉、ナゼ何所の娘でもいゝぢやアなひか、玉、イ、エ、萬一其娘が御内室さん

風俗でお花さんを邪魔にでもする様だとお花さんが何様にか悔しふござるますはネ 梅ウメイ
 ヤお前もお花女の味方だの案じなさんお前にも頓ていゝ男を丈夫に持せるからトいはれ
 てお玉は胸ドツキリ貌赤らめて 玉タマ否やアな兄上さんだねエ誰が丈夫を持ますものかト少
 し腹を立もかはゆらし忠之亟も腹にこたゆることならんか斯て此日は酒宴も終り明日の互
 視を約束してお花にも挨拶し梅里は我家へ歸り行跡にて又々種々とお花の心を察しつゝお
 玉忠之亟も氣をもむをお熊は最初の言葉に引かへお花を宥め鳥雅の方と梅里の計らひに道
 理を付て翌日忠之亟のお中を立派なる娘に化粧立お玉の小袖を梅里の方より送りしを着せ
 て十分に身ごしらへ惚々とする風にこしらへて梅里と俱に互あひまの場所へいだし遣るこそ可
 笑けれ

再説鳥雅の祖母と母親はかねて尋る嫁を媒人するもの有てしかも以前より知りたる梅
 里の姉なるよしを聞大きに悦び早速互視をせし所に彼お中なればお熊が丹誠にて常よ
 り十倍の美人となりしゆゑ祖母と母はいよゝゝ満足し鳥雅に見えとも此娘ならば氣に
 入に相違なし只娘の方にて男を不見ばいかゞあらんと相談するに兄の梅里も娘も兼て
 鳥雅の惚風俗は知て居る由の返答にて双方とも速に事調ひしが其以前より鳥雅の別家
 する用意も出来しと思はれて地面を二ヶ所に金子三千兩同じ家號にて支配人に預け置

たる砂糖問屋の店を所有代物あつしものと當時積着の荷物爲替金も登せ濟し千兩餘の砂糖家土藏
 問屋株を付て不殘鳥雅に引渡しけるは全本家の祖母の慈悲ふかきよりの情なれば其大
 恩に感伏して祖母を鳥雅の家に引取て敬ひさて吉日を撰みて梅里の姉を嫁入させ首尾
 よく婚禮を調へけるされば鳥雅は思ひがけなき妻定めも心にかゝるお花の事または小
 濱に薄雲とおもひ捨なんよしもなければ一旦身の上を納めて後になすべき手段も
 あるべし第一祖母の慈愛にて貰はんといふ嫁を違背もならじ只梅里の妹といふは合點
 ゆかずと思ひしが何事も縁によるものかとあきらめて婚禮しさて四五日立て祖母は本
 家へ用事ありとて出行いまだ下女も不定手代と小僧のみなれば奥はいたつて物淋しく
 鳥雅夫婦のさし向ひ何かひそかに笑ひながら

鳥トリノウお民寔に梅里さんは嬉しひ心ざしの人ぢやアないかしお前は相坂町でばりば
 りする唄女になりおふせた身の上だから今さら斯なつたのは窮屈で後悔かはな何様いたし
 て勿體なひモウゝ私は餘り嬉しひので何様も夢てはないかとぞんじますヨ 鳥トリイヤ此身
 も母人さんと祖母アさんが嫁を視立て持せる否應はいはせなひと言咄しいふを聞た節は何様せ
 うかと思つたはなかはひらしい娘をお内室さんになさるのがお嬉しくつて被爲所て則私だ
 からお前さんこそ後悔でございませう 鳥トリまた其様な否みをいふヨそれよりか互視あひまの節に

お中さんを視て婚禮の晩にお前の代つたのをよく母人さんが気がつかずにお在だと思ふよ
 はな「イ、エ悟つてお在だかも知れませんかよ 鳥ナゼ／＼はな」なぜでも此間あつちの御家へ
 お歸り被成節に私に對つて笑ひながらも夫ならば私はモウ歸るから以來でも相かはらず和
 合しなヨと被仰たから私ハハット存じましたは 鳥左様かそれぢやア氣どられたか、ウ何
 てもモウ斯なつちやアかまやアしねへはな「アアレサお見世から誰か参りますはネアノウそ
 れに母人さんの方から貴君が御最負で此家へお貰ひ被成た小僧の千松殿は私の貌を見ると
 最初ツからの事を知つて居るから毎度他人に隠して笑つて居ますは 鳥ナニ／＼彼は發明
 だから龜相な口を利く氣づかひもなし殊におれが目をかけて置から大丈夫だはな」それは宜
 ござぬますが私は薄雲さんの事も氣懸でなりませんから何様かしてお上被成ましナ 鳥其
 様な事まで苦勞にする事があるものかまた其前に梅里さんとお熊さんの中とお玉さんと忠
 さんの納りをよくしてあげなひければ安堵しなひけれごマアお前と我身が夫婦になつたか
 ら何よりか嬉しひ目出度春になつたのだはな「寔にモウ／＼嬉しひとも目出度とも言葉には
 盡されせんヨト寄添お花鳥雅の笑顔實に花鳥の名も一對目出度春をぞむかへける
 鳥雅お花の趣きはこゝに至りて目出度おさめたれども彼小濱千鳥の身の治り梅里お熊
 忠之亟お玉其外春告鳥に説殘したる人物の始終は次に出したる外題にくわしく記して

あり殊に薄雲が戀情の深き哀れなる物語また婦多川の奇談古今に稀なる新趣向を綴
 り江の鳥詣を卷の始にあらはし實に春色の一覽に備ふものなり

春告鳥卷之十五 大尾

158

112

發行所

花山堂書院

振替東京三〇一二二番

東京市四谷區坂町三十八

複製

不許

大正九年八月十五日印刷
大正九年八月三十日發行
大正十三年六月五日讓受

後の梅曆一
定價金二圓五十錢

校訂者 廣 瀬 夏 樹

發行者 山 本 義 一
東京市四谷區坂町三十八番地

印刷者 杉 本 新 吉
東京市麴町區飯田町六丁目一番地

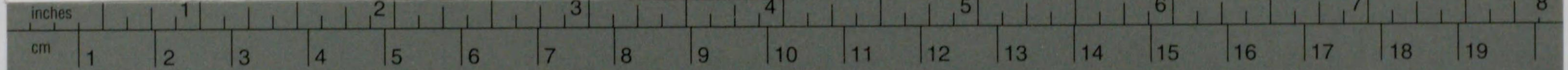


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

